

ネットニュースに対する誹謗中傷コメントへの 同調・拡散を促進する要因(4)

— 公正世界信念からの検討 —

○中上優季菜・夏目蓮司・中本朋花・佐藤加奈・金井円花・向居暁
(県立広島大学人間文化学部)

目的

近年インターネット上での誹謗中傷が深刻な社会問題となっている。誹謗中傷コメントの投稿はもちろんだが、それに同調すること(コメントに「いいね!」を押すこと)もまた、誹謗中傷を助長し、より多くの人が閲覧するきっかけを与える可能性があることを考えると、問題行動と考へてもよいだろう。

何かしらの悪い結果(犯罪被害など)が現れたとき、その責任帰属に影響を持つ特性のひとつに公正世界信念(Lerner, 1980)がある。公正世界信念は内在的公正世界信念(出来事の原因を過去の行いによるものと信じる傾向)、究極的公正世界信念(不公正によって受けた損失が将来的に埋め合わされると信じる傾向)、不公正世界信念(この世に公正は存在しないと考へる傾向)を下位因子に持つ信念である(e.g., 村山・三浦, 2015)。特に、内在的公正世界信念は、厳罰指向に関与する(村山・三浦, 2015)ため、同調行動に関連することが予測される。本研究は、公正世界信念が誹謗中傷コメントに対する同調行動や批判行動にどのように影響するのかについて検討することを目的とした。

方法

調査対象者 分析対象者は大学生と社会人158名(男性41名, 女性110名, 不明7名; $M_{age}=19.74, SD=0.10$)。
手続き 事実に基づいて作成されたネットニュース記事に登場する政治家(東京都議)に対して、3つの誹謗中傷コメント(記事内容に基づくコメント, 記事内容に基づかないコメント, デマを含むコメント)を提示した(夏目他, 2022; 中本他, 2022参照)。本研究では、コメント内容への同調(i.e., 「いいね!」)を「Good」、コメント内容への批判を「Bad」とした。そして、誹謗中傷コメントへGoodまたはBadを押す可能性、コメントへの賛成態度などへの回答を求めた。また、公正世界信念の指標として村山・三浦(2013)の多次元公正世界信念尺度を使用した。

結果と考察

提示条件による差異を統制したうえで重回帰分析を実施した。その結果、予測とは異なり、コメント

全体平均では究極的公正世界信念($\beta=.24$)がGoodを押す可能性と有意に関連した($R^2=.12$)。同様に、究極的公正世界信念($\beta=.24$)が、Badを押す可能性とも有意な関連を示した($R^2=.06$)。つまり、究極的公正世界信念が高くなるほどGoodだけではなく、Badを押す可能性も高めることが示された。同一人物が1つのコメントに対して、GoodとBadの相反した価値観を同時に持つことは考へにくいいため、究極的公正世界信念は、その個人の価値観、すなわち、コメントへの賛成態度に従った行動の表明を促進すると考えられる。そこで、コメントに対する賛成態度が、究極的公正世界信念とGood・Badを押す可能性との関係性に及ぼす影響を検討した。階層的重回帰分析の結果、コメントへの賛成態度は究極的公正世界信念とGoodを押す可能性との関係性を調整していた。単純傾斜検定の結果、賛成態度高群では、究極的公正世界信念が高い人のほうが、低い人よりもGoodを押す可能性が高くなったが、賛成態度低群ではそのような傾向は確認されなかった。同様に、Badを押す可能性を目的変数とした階層的重回帰分析の結果、コメントへの賛成態度の調整効果は認められず、賛成態度が低いほど($\beta=-.19$)、また、究極的公正世界信念が高いほど($\beta=.23$)、Badを押す可能性が高まることが示された($R^2=.10$)。

本研究の結果、誹謗中傷コメントに対して賛成している場合、究極的公正世界信念が高いことが、「いいね!」するといった同調行動を促進する可能性が示された。六瀬他(2018)は、究極的公正世界信念、すなわち、「苦しんだものは報われるべき」という被害者を軸とした世界の公正性を求めることが、加害者(有前科者)に対する敵意的な感情や復讐への欲求を高めることで、加害者を受容する行動を阻害示した。この知見に従って、本研究結果を解釈すると、究極的公正世界信念の高い人は、誹謗中傷コメントの内容に賛成する場合において、自らの公正性を保つために、加害者に敵意を抱く結果となり、コメントに対して同調行動を示しやすくなった可能性があるかと推察される。